

氏名	鈴木 啓資
ヨミガナ	スズキ ケイシ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博第 12 号
学位授与年月日	2021 年 3 月 12 日
学位論文題目	ドホナーニのピアノ教育とテクニック ——教育作品とピアノ 独奏曲をめぐって——
博士論文審査委員会	(主査) 教授 村田 千尋 (音楽学) (副査) 客員教授 村上 隆 (ピアノ) (副査) 准教授 川上 昌裕 (ピアノ) (副査) 教授 藤田 茂 (音楽学) (副査) 伊東 信宏 (音楽学) (大阪大学教授)
博士演奏等審査委員会	(主査) 教授 村田 千尋 (音楽学) (副査) 教授 岡田 敦子 (ピアノ) (副査) 客員教授 村上 隆 (ピアノ) (副査) 准教授 川上 昌裕 (ピアノ) (副査) 教授 小串 俊寿 (サクソフォーン) (副査) 准教授 伊達 英二 (声楽) (副査) 教授 藤原 豊 (作曲) (副査) パップ 晶子 (ピアノ) (鎌倉女子大学教授)

審査結果の要旨

1. 博士論文審査委員会

日	時	2021年2月15日(月) 9時30分～12時00分
場	所	Zoomでの開催
判	定	<p>合格</p> <p>本論文はハンガリーの作曲家ドホナーニ・エルネーによるピアノのための教育的作品(教則本、練習曲)4作品について、それぞれを詳細に検討すると同時に、それら相互を比較検討し、さらに彼のピアノ独奏曲全曲について、「テクニック」の点から考えるという論文である。日本ではドホナーニに関する研究はほとんど皆無であり、この研究は重要である。ピアノ教育と実践的に関わっている学位申請者に対して、反省的考察と実践とを結ぶ音楽博士号の授与に値する内容と認められる。</p>
審査結果の要旨		<p>予備審査における指摘事項がよく生かされ、第1章から第3章までに関しては、完成度の高い論文に仕上がっている。とりわけ、序において練習曲の歴史の概観やバルトークなどへの言及が加わり、第1章におけるドホナーニの伝記的記述が、教育活動との関係から練り直されたことで、第2章の教則本の議論、第3章の練習曲の議論とよく連続するようになったことは、本論文の主題を浮き立たせるうえで、きわめて有効な改訂であった。</p> <p>しかし、「テクニック」の捉え方に疑問が残った。ドホナーニにおいては、作曲上の書法(Conceptionの次元)と、それを身体的・物理的な手段で現実の響きに変換するメカニック(Realizationの次元)とは、やはり別物であると思われる。本論文が、「テクニック」という用語のもとに両者を平面的に扱い、そこにあるはずの根本的な差異を無化してしまったことは残念である。つまり、「テクニック」というものが独立して存在し、それらの「テクニック」の組み合わせとして楽曲が構成される、というイメージについて再考する必要があるのではないだろうか。ドホナーニのピアノ独奏曲は、「テクニック＝メカニック」の選択的組み合わせとして捉えるべきなのだろうか。もっと素朴に「楽想」があつてそれが定着され、結果的にそれを表現する「テクニック」があると考えることができるはずである。</p> <p>教則本で扱われる「テクニック＝メカニック」が、練習曲上の「テクニック＝書法」にどう表れるかという第3章の分析には説得力があるが、第4章において、同じ分析方法を練習曲ではないピアノ独奏曲に拡大適用することが有効であるのか、再考してもらいたい。ピアノ教育ということに軸を置くのであれば、第4章はドホナーニの独奏曲をマスターするために、彼の教則本や練習曲をどのように活用すべきかを論じるのに充てることも考えられたのではないか。</p> <p>ここに指摘した問題点は更なる発展のための手掛かりとして捉えて貰いたい。曲の細部まで丁寧に調べ、堅実に積み上げてゆく手法は高く評価できるし、巻末資料として挙げられたピアノ作品一覧表、比較表、テクニックの割合表、そして4曲に関する分析譜は大変な労作であり、貴重なものである。</p>

2. 博士演奏等審査委員会

日 時	2021年2月3日(水) 17時00分～18時20分
場 所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス TCM ホール
判 定	<p>意欲的なプログラムを表現力豊かに演奏し、かつ、プログラムノートもよく工夫されている。</p> <p>よって、審査委員全員一致して「合」と判定する。</p>
審査結果の要旨	<p>ドホナーニの作品群から特徴ある様式をもつ楽曲を並べたことで、コンサートの意図が良く伝わった。演奏を通して、この作曲家とその作品を研究の対象とする価値が十分あるものであることが感じられた。今後もドホナーニ研究を継続し、ドホナーニ作品を広め貫きたい。</p> <p>演奏にハンガリーらしさを出す奏法の追求もされていて、演奏効果が上がっていたが、民謡が引用された作品の演奏をするにあたって、引用された旋律の伝統や性格の研究をさらに深めることを勧める。民族的な音組織と機能と声の弾き分けについても、更に研鑽を積んで欲しい。</p> <p>満席でも響きすぎる TCM ホールで、かなり気を使って打鍵し、フォルテの表現をするために、鍵盤を叩きつけなかったことは評価に値する。また弱音の表現も指先まで神経が行き届いていたと思う。リズムの刻み方にも努力の跡がうかがえた。それでもなお、強音の演奏（特に和音）の響きが多少、ワンパターンになることがあった。テンポや和音の密集度によって、響きをコントロールできるともっと素晴らしい演奏になると思う。</p> <p>後半に演奏したドホナーニが 14～16 歳の時に作ったピアノ四重奏曲について、ほとんど知られていない作品の堂々たる紹介ができたことは、価値ある業績である。時としてとりとめないところのある作品をまとめ、表現にまで持っていくには指揮者としての発想が必要だったと思う。この曲の可能性を再発見し引き出した努力を評価する。しかし、譜読みも含め解釈をじっくりと練り上げる時間は少々足りなかった様に思う。ピアノが弦楽器を音楽表現でリードする場面がもっと多くあってもよいと思った。</p> <p>リサイタル全体として、大変に素晴らしいものであったと高く評価する。</p>

以上